

「令和6年7月25日からの大雨」で被害が大きかったねぎ圃場の特徴

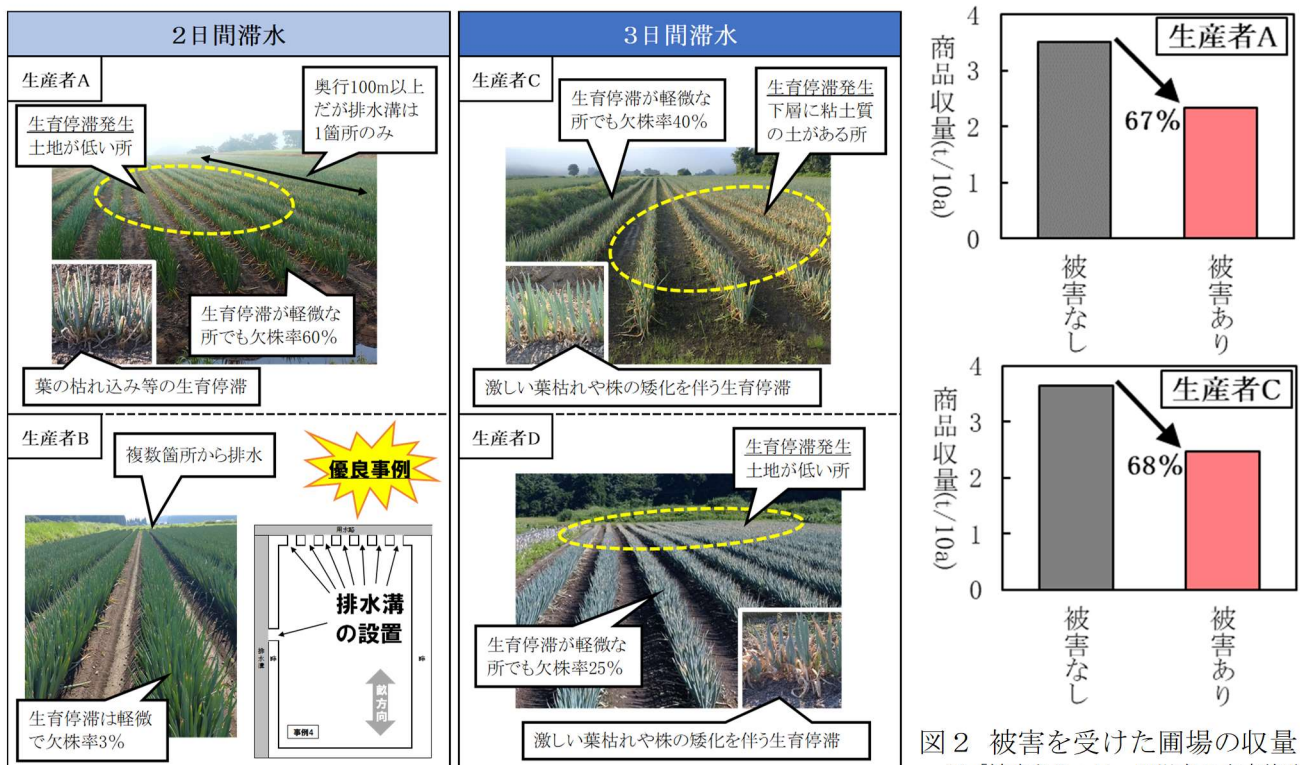
山形県最上総合支庁産業経済部農業技術普及課産地研究室

研究のねらい

令和6年7月25日に、最上地域では記録的な大雨が発生し、浸水被害を受けた圃場が多く見られた。ねぎでも多くの圃場が被害を受けたことから、浸水状況および生育・収量等への影響について、調査を行った。

研究の成果

- 大雨による浸水で2日間程度滞水した場合は、排水不良の圃場で葉の枯れ込み等が生じた。3日間程度滞水した圃場では、激しい葉枯れとともに株の矮化等が生じた。これにより、生育は1か月程度停滞し、生育が停滞しなかった株でも、後に腐敗等による欠株の増加が見られた(図1)。
- 特に生育停滞が著しかったのは、圃場内で低くなっている場所(生産者A、D)や、下層が粘土質になっている場所(生産者C)であった(図1)。
- 生育停滞による細物増加や欠株の発生で、商品収量は被害を受けていない圃場の約60~75%となった(図2)。一方、2日程度滞水した圃場でも、複数箇所排水溝を設置していた圃場では生育不良や欠株が少なく、商品収量の減少は見られなかった(生産者B)。



※「被害あり」は、圃場内の生育停滞が著しい場所と生育停滞が軽微な場所を同面積と仮定した場合の商品収量